

Computer Report

Vol. 50 No. 10 10月号 (通巻 673号)

はじめの言葉

■今夏の猛暑続きで山中ではドングリが不作だったという。だから、ドングリを好物としている熊が飢え、食べ物を求めて里に下りてくるケースが多いのだそう。運良く捉えられ、山中に送り返された熊はいいが、猟友会のメンバーに射殺された熊は気の毒というほかはない。元はと言えば人間による開拓が進み、熊など動物が生息できる環境破壊が原因である。その意味で、食べ物のない山中に送り返された熊も、救われた訳ではない。

■自給率が問題になっている我が国の食糧事情だが、今年の猛暑の影響で美味しい米の代名詞である新潟産の米が、その等級を落とし、新米の値段が昨年の古米の値段より下がっているとマスコミは大騒ぎをしている。しかしこの現象は、ほんの一部の地域特性で、概ね豊作だったようだ。減反青田刈りは依然として続けられている農業政策である。青田刈りをするくらいなら、熊の飼料にでも廻してやれないのだろうかと思う。

■人力に頼る農業中心の社会から、蒸気機関の発明を機に大規模な動力源を得た人間は、一気に工業社会を形成し、生産能力を一層高め、消費量を軽く追い抜き、大量の余剰物資を産み出すまでになっている。今や手のつけられないほどの超余剰物資時代に突入している。これによる「ものあまり現象」が、今日のデフレ現象の一番の原因だと思う。にもかかわらず、さらに生産性向上を指向している。人間は何と欲張りな生き物だ。

■動物たちは、自分が生息する山中だけをテリトリーとして、生涯その中で恵みを頼りに過ごす。恵みが増えれば自らの種の数を増せるが、自らの生息数が増えれば即ち飢える。自然の恵みの中で許されるだけしか生息することができない。しかし人類だけは違う、とこれまで信じてきたが、今の日本企業という森のキャパシティは、すでに日本人の生息可能限界に達してしまっただけのように感じることもある。

■脱工業社会と言われて久しいが、そろそろ本格的な「情報社会」になりつつあると認識してもいいかもしれない。情報社会とは何かと問われて、即座に回答できる人は少ないだろう。しかし、コンピュータ&コミュニケーションテクノロジーを駆使することで、非常に多くの情報を知り伝えることができる社会だというくらいは解る。手段としての情報社会環境は着々と整備されている。問題は、いかに正しい情報を入手し、伝えるかである。

■情報洪水と表現される時代でもある。恵みの雨がないと干ばつ被害を受けるが、短時間の豪雨はまた洪水被害をもたらす。正しく適切な情報は有効だが、不確かな大量情報は、不適切な情報処理（判断）を人間にもたらす危険がある。大量水を放置すれば洪水となるが、治水することで様々に有効活用できるように、いかに大量情報とは言え統治することで人間の意思決定を助けてくれることを期待したい。

■情報社会では、自らが情報を知る義務／権利と、他人に情報を知らしめる義務／権利を持つと特徴付ける考え方がある。本年、ノーベル平和賞を受賞した劉暁波氏だが、中国政府はこの事実を自国民に伝えようとしていない。まさに中国政府は、国民の知る権利、国民へ知らせる義務を無視する次元で国家運営をしていこうということらしい。果たしてこのやり方で、どこまで情報洪水を統治できるのだろうか。（藤見）